

平成25年 6月26日 9時



(気象庁提供)

関東地方は6月6日、平年より3日早く梅雨入りした。

予報当番者は、空を仰ぎながら天気図を読み、明日や明後日の予報、さらに大雨が予想される場合は気象警報などに備える。天気図を読むという作業は、もう100年以上も前に天気予報が始まった時から、今も受け継がれている基本だ。

予報者が用いる天気図には、晴・曇・雨・視程などのほか、気温、露点温度、風向・風速、気圧がプロットされ、等圧線、高・低気圧や前線も表されている。気象状態が一目瞭然だ。



2016.6.12

「気象コンパス」主宰

古川武彦

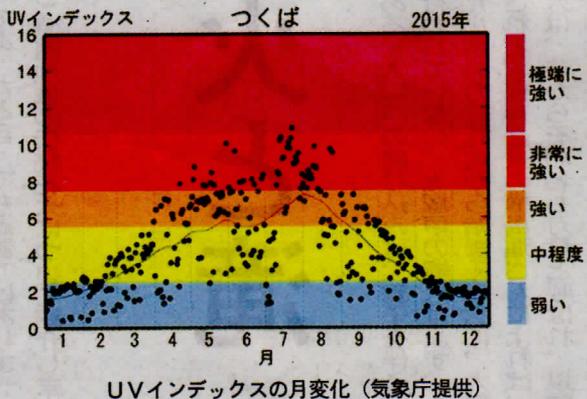
梅雨型天気図

線も表されている。気象状態が一目瞭然だ。

一方、天気図を季節で見れば、冬型・夏型天気図など季節の顔を持っている。梅雨の天気図の主役は、図に示すようにオホーツク海方面から本州南岸に張り出し、冷たく湿った北東気流をもたらす「オホーツク海高気圧」、日本の南海上から暖かく湿潤な南西気流を送り込む「小笠原高気圧」、そして両者がせめぎ合う帯が「梅雨前線」。梅雨前線上にはしばしば低気圧が発生して東に進み大雨をもたらす。また前線は南北にも振動するため、ちょっとした偏りで天気はガラリと変わる。

今や「実況天気図」はもちろん、24時間や1週間先までの「予想天気図」がパソコンで作成され、天気予報の案文すらも用意してくれる時代に発展した。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



UVインデックスの月変化 (気象庁提供)

梅雨の晴れ間には真夏のような日が注ぐので外出には注意が必要だ。太陽光には「紫外線」が含まれており、浴び過ぎると皮膚の炎症などを起こす恐れがある。紫外線は種々の波長帯で構成される。一番短い帯のUV-Cは上空の「オゾン層」ですべて吸収されて地表に達することはない。中間領域のUV-Bは、大部分は「オゾン層」で吸収されるが、一部は地表に達して身体に悪影響を与える。長い帯のUV-Aも吸収されずに地表に達し影響を与える。

世界保健機関 (WHO) では紫外線強度を指



2016.6.19

「気象コンパス」主宰

古川武彦

紫外線

数化した「UVインデックス」を定め、活用を推奨。気象庁では長年にわたる紫外線観測を踏まえて、UVインデックスの日々の実況と共に、今日や明日の晴天時の予測も行いホームページでも公表している。

図はつくば市の高層気象台の昨年のインデックスの変化を黒点で、平年値を実線で表した。6月から上昇に向かい、7月は極端に強い日が見られるが、9月に入ると減少。標高が高いほど紫外線は強くなる。登山は日よけなどの対策を。

よく耳にする「南極オゾンホール」は南極に限らず北極や高緯度地方でオゾン層が破壊されポツカリと穴 (ホール) が開く現象で紫外線も増える。原因は廃棄された冷蔵庫などから放出された「フロンガス」だと分かり、すでに排出が禁止されているが、現在でもまだ起きている。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)